

# ウィリアム・サマセット・モーム『人間のしがらみ』に於ける 少年の体罰への欲望

ナショナリズムと騎士道精神の交錯点として

金永亜

## はじめに——なぜ体罰表象を問うのか

19世紀末から20世紀初頭にかけてイングランド文学で描かれた子供への体罰には特殊な背景がある。近代初期には子供は邪悪な存在とされ、原罪説が子供への体罰を正当化していたものの、子供の本性を無垢なものとして提示したルソーの『エミール』が強い影響力を持ち、ワーズワースなどのロマン主義の文人が子供の無垢を称揚すると、その価値観はミドル・クラスを中心に広がった (Cunningham, *passim*)。だが、思想上の変化が生じて、学校での体罰の法禁化は1980年代までなされず、体罰は長きに亘ってイングランドの教育に不可欠とされていた。では、子供が邪悪であるとの考えが徐々に薄れてきた時代、体罰はどのようにして正当化されたのか？あるいは、文学において体罰はどのように意味づけられていたのか？本発表は、これらの問いを考える上で、モーム『人間のしがらみ』の体罰表象をキプリング「レグラス」の体罰表象と比較しつつ、分析したものである。

## 『人間のしがらみ』で描かれた、体罰を耐え忍ぶことへの少年たちによる称賛

『人間のしがらみ』の主人公フィリップは小学校に入学してまだ日の浅い頃、上級生のシンガーに命じられ、校内で禁じられていたペン先を使ったゲームをしていたところを校長に咎められる。その際のフィリップの心理は「何が起こるかわかって、ひどく恐怖を感じたが、恐れの中にはある種の歓喜もあった。彼は今まで一度も答打たれたことはなかった。もちろん痛いはずだが、あとで自慢の種になる」 (Maugham, 62) と描かれている。校長は二人を書斎に連行しシンガーを答打つが、フィリップのことは新入生であり足に障害を持っているとの理由で答打たない。二人が教室に戻ると、噂を聞きつけた他の少年たちに取り囲まれ、質問攻めにされる。フィリップは、障害を理由に自分が答打ちを免れたことを知った彼らが「軽蔑の眼差しで見てくるのを感じる」 (62) こととなる。これらの描写は、体罰を耐え忍んだ者が少年たちの間で尊敬され、ある種英雄視されていたことを示唆しているが、体罰を耐えることへの称賛の背後には、何があったのか？

## 1880年代以降の少年文化に染み渡っていた騎士道精神と帝国主義

本発表は、その背景を探るにあたって、1880年代以降の少年文化に染み渡っていた騎士道精神と帝国主義に着目した。なぜなら、少年向けの読み物は少年たちに大きな影響を及ぼしており、とりわけフィリップはその熱心な読者だったと考えられるからである。たとえば、小学校に入学した日、フィリップは自分より小さな少年ヴェニングに向こう脛を蹴られるが、その際仕返しをしなかった背景の一つとして「『ボーイズ・オウン・ペーパー』には自分よりも小さい者を叩くのは卑劣なことだと書いてあった」 (52) との記述があり、この雑誌が就学前のフィリップに道徳規範を内面化させていたことが窺える。また、フィリップが伯父に連れられて小学校に行く場面にも、「学校生活のことは『ボーイズ・オウン・ペーパー』に載っていた話を読んだくらいで、あとはほとんど知らなかった。『エリック、一步また一步』も読んでいた」 (48) との描写がある。

繰り返し出てくるこの雑誌はどのような特色を持つものだったのか？ Bamford は、次のように述べている。

そのような暗示 [パブリック・スクール出身者であれば帝国主義的な価値観を持っており信頼できるということ] は、トム・ブラウン [『トム・ブラウンの学校生活』] で描かれた試合や乱闘に萌芽がある。それらは『ボーイズ・オウン・ペーパー』において発展し、G. A. Henty などの作家により形式化された。 (243-44)

G. A. Henty の著作を読んだ少年たちが、戦争で活躍する英雄たちに自己同一化することができたとの Bamford の後の指摘 (244) も踏まえれば、『ボーイズ・オウン・ペーパー』が帝国主義を促進するものだったとわかる。

では、具体的にどのような要素が帝国主義的だったのか？ Bamford が言及した『トム・ブラウンの学校生活』には、フットボールの試合で少年たちが大怪我をしてまで自分の寮のために戦い、そうした行為が賛美される箇所が多くある。少年たちの所属集団を寮から国へと変えるだけで、これは国家間の戦争における自己犠牲の賛美となり得る訳であり、この物語の滅私奉公的な要素が、帝国主義とマッチしたと考えられる。

また、少年文化についても一つ見逃してはならないのは、騎士道的な要素である。Harrison は、ヴィクトリア朝中期から後期にかけてミドル・クラスとアッパー・クラスの文化に統合された中世主義的な言説として、「騎士道、男らしさ、無私、勇敢さ、名誉、義務、忠誠 (王位に対しても最愛の者に対しても)」 (599) を挙

げているが、『トム・ブラウンの学校生活』における自己犠牲的な行為とその肯定・賞賛は、まさにその全てを体現したものといえる。校長寮チームの主将ブルックが、下級生たちが忠誠を尽くすべき王のような役割を果たし、ブルックから労いの言葉をもらうために怪我をも厭わない姿勢をトムが持っていることは、騎士道と無縁とは言えない。騎士道精神は『トム・ブラウンの学校生活』の作者ヒューズだけでなく、就学前のフィリップが読んでいた『エリック、一步また一步』の作者ファーラーにも影響を与えていた(Tozer, 25-26)。また、ボーイスカウト運動の創始者ベーデン＝パウエル( Baden-Powell)の著書にも、その影響があることが指摘されている(Mangan, 16-17)。従って、『人間のしがらみ』の主人公が少年時代を過ごした1880年代から実際の小説が出版された1915年に至るまで、帝国主義と騎士道精神は絡みあうような形で、少年文化全般に大きな影響力を持っていたといえる。

### キプリングの短編「レグラス」の体罰——騎士道的・帝国主義的な誉れを呼び込むものとして

騎士道と帝国主義の一体化が明確に見て取れる体罰表象が、『人間のしがらみ』とほぼ同時代の1917年に発表されたキプリングの短編小説「レグラス」にある。「レグラス」では、軍人志望の子供向けのパブリック・スクールにおいて、本来受ける必要のなかったはずの笞打ちを校長の意向によってラグビー・チームのキャプテンから受ける羽目になった5年生のウィントンが、体罰を自ら進んで受けた後、待ち望んでいた一軍選手のキャップを与えられた上、副監督生に昇進する様子が描かれる。McDermottは、この小説における体罰が、帝国のための戦争やその他の任務遂行に足る精神・身体を鍛錬する役割を果たしていると指摘する(374, 385)。また、小説冒頭の古典の授業の場面で、ローマのために自己を犠牲にした将軍レグラスの話が取り上げられ、さらにウィントンと繰り返し重ね合わせられていることを踏まえ、自ら進んで体罰を受けるという行為が、不屈の精神や名誉といった古典の授業で示された武人の規範を体現したものとなっていると述べている(370, 371, 379, 387, 391-92)。

ここで、古典が体現するのはギリシア・ローマの武人の規範であって、中世の騎士道精神とは異なる、との指摘があるかもしれない。しかし、レグラス将軍の行為を模範として示される、自分の所属する集団(国)のためなら自分の命さえ投げ出すことをも美徳とし、何よりも名誉を重んじるという価値観は、当時の少年文化に根付いていた騎士道規範によって引き継がれていると考えられるのではないかと。受ける必要のなかったはずの体罰を自ら進んで受けるという行為には、騎士道精神に通じるメンタリティが潜んでいるのだ。

### 『人間のしがらみ』のキングス・スクールでの体罰が持つ意味

『人間のしがらみ』の舞台となったキングス・スクールは、宗教色の強い伝統校として描かれているが、ここでの体罰にも「レグラス」で確認されたような意味が付されている。まず、学校の所在地ターカンベリーは軍事色の強い場所として描かれ、教師陣も軍隊の機嫌を窺う立場にあることが示唆されている。また、この学校ではスポーツが重要な位置を占めているが、パブリック・スクールにおけるスポーツは、少年たちが騎士道的な価値観を学ぶ教育機会となっていたと言われている(Osborn, 303)。これらのことと、1880年代以降の少年文化に騎士道精神と帝国主義が浸透していたことを鑑みれば、『人間のしがらみ』の体罰にも、騎士道的・帝国主義的な名誉の意味が付されていた可能性は、十分にあるといえよう。

### 引用文献

- Bamford, T. W., *Rise of the Public Schools: A Study of Boys' Public Boarding Schools in England and Wales from 1837 to the Present Day* (London: Nelson, 1967).
- Cunningham, Hugh, *Children and Childhood in Western Society Since 1500*, Studies in Modern History, 3rd edn (1995; London and New York: Routledge, 2021).
- Harrison, Antony H., 'Mid-to-Late Victorian Medievalist Poetry', in *The Oxford Handbook of Victorian Medievalism*, edited by Joanne Parker, Corinna Wagner, paperback edn (Oxford: Oxford University Press, 2023), pp. 597-615.
- Mangan, J. A., 'Duty unto Death: English Masculinity and Militarism in the Age of the New Imperialism', in *Tribal Identities: Nationalism, Europe, Sport*, edited by J. A. Mangan (London: Frank Cass, 1996), pp. 10-38.
- Maugham, William Somerset, *Of Human Bondage: A Novel*, The Collected Edition of the Works of W. Somerset Maugham (London: Heinemann, 1937; repr. 1989).
- McDermott, Emily A., 'Playing for His Side: Kipling's "Regulus," Corporal Punishment, and Classical Education', *International Journal of the Classical Tradition*, 15 (2008): 369-92.
- Osborn, E. B., *The New Elizabethans: A First Selection of the Lives of Young Men Who Have Fallen in the Great War* (New York: John Lane, 1919).
- Tozer, Malcolm, *The Ideal of Manliness: The Legacy of Thring's Uppingham* (Portsmouth, Truro: Sunnyrest Books, 2015).